

東京部隊

高麗の丘 (一)

吉田吉之助

れわれはそれに居ついた。

これがまあ終の栖か泥五尺

丘の上に立つと彼方に、博多帯をひろげたような幅広の鴨緑江が魚鱗のせせらぎを見せている。その流れが鶴翼の丘陵に遮られて、丘の向うに影をひそめ、やがて澹をなして眼下の潭に流れ込むと、鴨緑の油状と化し、ドロンとした翡翠の淀みとなる。潭の向う岸の岩肌の斜面に小松の林が明るい。あすこは朝鮮の平安北道である。

頭をめぐらせば、いま立っている丘は、うねうね起伏し、その果ては朔北に及ぶのであるうか。いのちを終えた枯草が項を垂れて折り敷き、その根の中から息吹いた若芽が、水晶の露を含んでいる。そんな丘陵の峽に何軒かの農家が点在し、その中のわりあい大きな房子（家屋）が兵舎と定められ、わ

細長い土間をはさんで両側に、粘土で固めた温突が二列に並び、それから五尺にみたぬ土壁が立ち上って、むき出しの草の天井を支えている。温突の上敷きは古びた飴色のアンペラで、男が立ちあがると、いが栗頭が草屋根を押し上げる程の低い立端であった。そんな平家建てが矩形に配置されて中庭を囲み、表ての道に面したところに入出口がつけられていた。そこに衛兵所が設けられた。

突然に異境に來た兵隊たちは、一日の作業を終えると、なれぬ手つきで石油ランプに火を点じ、その下で夕食をすませ、キングや講談倶楽部を読む者もあれば、故郷への便りを書く者もいる。そうして、

「朝鮮」と、支那と境の、あの鴨緑江、……ヨイショ、と鴨緑江節を唄った。その低調の節まわしに、ときにランプが瞬き、住みなれぬ異民の家に一人の旅情を添えた。

このあたりは東辺道と称される。大陸の東の辺境という意味であろう。北の方白頭山に源を発した鴨緑江が、東へ向って黄海へと流れ、支那大陸と朝鮮半島を区分している。

ここはその昔、南満州から北朝鮮へかけて、ツングース系（満州族）の扶余人が高句麗（高麗、こま）の国を建てたところである。その都は初め北方、鴨緑江沿いの丸都に置かれ、のち南方の大同江に臨んだ楽浪（平壤）に移され、前漢末（前三七）から七世紀（六六八）にかけて、七百年に亘って栄えた。この慍悍な騎馬族の国には、さすがの漢帝国も、また、それ以後の歴代王朝も手を焼きつづけた。隋の煬帝などは、遙か西のかた長安（西安）から兵を起し、幾たびかこの地を攻めたが、ことごとく失敗に帰し、ついにそれ自身が滅んでいった。そして、高麗は唐にいたって高宗に滅ばされてやんだ。

この時、若光王以下千八百人も、要人が日本に亡命し、はじめ諸国に散住したが、わが奈良王朝は武蔵の国に高麗郡を創設、そこに集結定住させ、この人たちを保護した。時の高麗

郡は、いまの埼玉県川越市の西方で、そこにある高麗神社と聖天院を中心とした地域である。この地域は、わが歩兵第一聯隊の徵募地区であるから、われわれの戦友の中には高麗人の血を受けた者もそうとういるであろう。そういう人たちにとっては、この遠征は千二百年ぶりの里帰りの意味があったわけだが、ここにやって来て、故山の思いに耽る者は一人もないようだった。

鴨緑江を溯ると、その中流が通溝平野を貫流するところ、今の吉林省輯安県の一角に、高麗の古都・丸都があった。そこには五世紀建立の、かの有名な好太王碑が現存するという。これは日鮮関係の古史料としても重要だが、芸術としても貴重で、漢代の古隷を伝承した立派な書作である。

われわれの居たところは、それより下流で、満州国安東省寛甸県の名で称ばれ、とりわけて、これという名勝もなく、これという文化も見られない荒涼の地であったが、流れては幾たびか碧の潭をなす鴨緑江の水は、往昔この地で焼かれた名器、あの高麗青磁の深い色に通うものがあつた。

二・二六事件後の昭和十一年五月、歩兵第一聯隊は牛島満大佐に引率されて、赤坂櫓台を後に、玄海を渡り、大陸を縦断して北滿に移駐し、本隊は北方黑竜江沿岸の警備に任じた。その第二大隊（大隊長中熊直正少佐）は中途で主力と離れて、ここ南滿の寛甸県へ派せられ、本部を寛甸の町に置き、その隷下のわが第七中隊（中隊長小林孝一郎大尉）は、鴨緑

江右岸から程遠からぬ楊木川という僻村に居た。

兵隊たちは、小林隊の居城を楊木川砦と自称したが、この砦には矢来もなければ、便所も風呂もない。高橋木工兵が風呂桶を組み立てれば、山崎上等兵は急造便所の壁に泥土を塗る。松井伍長が衛門に土嚢を積み、永瀬軍曹が衛兵交代を指揮する。

衛兵下番の兵隊たちが班に戻って来て、銃の手入れをし終わると、秩父山中出の兵隊の一人が、抱えた箱の中に蹲る小さな獣を私に見せて、

「上等兵殿、これは狐の子だといって売りに來たんですが、どうも、うちの方で獲れる狐の子と異うようであります。狐にしては、少し毛がコワいし、毛色がちがいます。まさか、狼じゃないでしょうかね」

という。私は、そのあどけない小動物の怯えた表情を見て、「いくらで買ったか知らないが、だいたい、五十銭や八十銭で、狐の襟巻を丸ごと生け獲ろうという了見がよろしくない。

狐の嫁入りの火は、五月雨の降る今夜のような晩に、ポカリポカリとあらわれるそうじゃないか。その嫁さんが産んだ大事な子供をかつぱらって來たんじゃない、化けて狼になるかも知れんよ、ね」

と云うと、脇に居た一人が、「俺のは正真正銘の栗鼠だから安心だ」という。

手製の籠に小鳥を入れて、餌付けている者もいれば、狗子（子犬）を飼っている者もいる。衛門の前には毎日、小孩（子供）が動物の子や小鳥を売りに來て、門前市をなしていた。

そんな間に、中隊長は私を呼んで、一枚の楊の薄板を手渡し、これに「日本軍楊木川守備隊」と書けという。この思いがけぬ命令に戸惑った私は、石門銘、鄭文公之碑、九成宮醴泉銘、顔君廟碑など、さまざまな古碑を思い浮かべたあげくに、洒落たつもりで書いた好太王碑の倣いが、見るにたえない俗悪なものになってしまった。仕方なく、これを鉋で屑り落とし、ますます薄くなった板に、なんの変哲もない自己流の書を書いて、その責を果たした。

チビ筆にわが力腕の責を着せ

砦の整備の総指揮官伊東少尉は、仕事が一段落すると、「ご苦労だった。今日の午後は休養せよ」といって、慰労のために酒や肴を放出してくれた。兵隊たちは中庭にアンペラを敷きつめ、車座をなして、且つ唄い且つ飲んだ。

次の七五調の歌には、牛島、中熊、小林隊長の姓が読み込まれており、「防人歌」と題されて、この時はじめて公表されたものである。作者は読み人知らず、一兵の作とされて匿名であった。

防人歌

なんの因果か知らねども
四つ足どもに囲まれて
喇叭の音に勇みつ
牛に率かれて善光寺へ
涎の跡を踏み行かば
島山遠く陽は落ちて
五月の闇の菖蒲占
死んでも命があるように
道中途の熊野路に
杖を止めて願かけりや
権現様の宣うに
勿来の関に風立ちて
道も狭に散る山桜
落花の雪に踏み迷う
逢坂山の朝ぼらけ
人の運命にほろほろと
啼く鳥の音に泪せば
道陸神の言ありて
旅の風流を讀えなん
夫れ逝く者は雁金の

草生す屍山行かば
水漬く屍海行かば
風のまにまに不知火の
波越え行かば呉か越か
雲のまにまに水と
野を去り行かば梁か魏か
葭葦しげき人の世の
行く手さだめ捨小舟
江を渡りて彼の岸の
小高き丘に佇めば
林の中に少林寺
門を叩きて言問えば
かたき扉の開かれて
達磨大師の申すよう
南朝四百八十寺
梁武と共に汝もまた
煙雨のうちを彷徨いて
いま白頭の夕まぐれ
柴枯久しき鴨緑の
草の褥に明け暮れて
石の枕の冷たきに
首を冷して神妙に
見果てぬ夢の飢餓となり

喝の一つも喰いなば

桃栗三年柿八年

九年の壁も泡沫の

水泡と消えて人の身の

命冥加を覚ゆべし

めぐる因果を悟るべきかな

この歌を虎造ばりの浪曲の節で唄う兵隊がいた。中隊長は終始ニコニコしながら、聞き耳を立てている様子だったが、宴後、

「この歌はなかなかの名歌だ。ガリ版刷りにして配れ」

といった。夜の班内で、これを御詠歌のふしで静かに唄う粹人がいて、ビール瓶に石を入れた巡礼の鈴が風流な音を立てた。

少林寺の住職・小林老大尉は、寺域から見上げる大木の梢上に櫓を組ませ、そこに歩哨を立てた。この歩哨は双眼鏡をもって四方を展望した。遠くの山肌に牛を追う農夫が見えたり、のちには、すぐそここの櫓の木の枝に巣がけた鴉の子が、親から餌をもらう情景が手にとるように見えた。

するとある日、その木に白い花が咲き始め、これが山梨の木であることがわかった。房のようになって、枝に連なる蕾が一、二輪はころびて鼻先に揺れると、樹上の歩哨は、下から見上げる仲間に向かって、花咲爺さんが灰を撒くまねをし

て見せたりした。そのうちに、一夜暖風が吹きつゝのり、それが明けると、中隊長当番の八木一等兵が駆け込んで来た。

「上等兵殿！ 吉田上等兵殿、梨の花が今朝満開です。中隊長殿も見ておられます」

と云って、私を揺り起こすのである。中隊長は毎日起床時刻前に起きて、窓を開け、東方遙拝のあと、軍人勅諭を奉読し終わると、歴史書を読むのが朝の習わしであるという。それ故、私の分隊員だった八木と黒沢の両当番兵は、毎朝起床時刻前に起き出る。中隊長は、「老人は早起きだが、若い者は眠たかろう。無理して早く来んでもよろしい」と云っていた。そうだが、当番兵としては、そうはいかなかった。老大尉の読む歴史の本は、彼らに訊くと、徳富蘇峯の『近世日本国民史』だそう、大冊のこの本を含む中隊長の蔵書の量は、数頭の馬につけるほどあって、その梱包、運搬、整理には彼等当番兵はそうとう骨を折っていたようだった。

夕方近くになると、幹部がまず入浴し、兵がこれに続き、最後に中隊長が風呂には入る。揮一つの老大尉は、手拭を肩に、庭を横ぎって自室に戻って行った。二十数貫もある大達磨の巨体から汗が流れ、禿げた頭から湯気が立っていた。老大尉は窓を開け放ち、裸のまままで茶をすすりながら梨の花を眺めていた。兵隊はその姿に目をやり、一幅の古画の中に三昧の達磨を見出した感興にさそわれるのだった。

樹上の歩哨は密々の梨雪に身を没し、粉々の飛花を浴び

て、鶴筆をまよって佇立し、樹下往來の兵士は、花誘う風の庭を驚帽をかぶって立ち徘徊した。歩哨交代に際しては花の雪崩が起きた。散る花に勿来の風懷をいだく者もあれば、日々花模様に移ろう枝に、ふくらみ行く緑の若芽を見ては、晩春との別離を悲しむ者もいた。

夕月の枝に零るる雪月花

まったく、花に棄てられる人間ほど、みじめなものはない。永田青嵐は後藤新平の柩にハラハラと舞いかかる落花に心をいため、

花吹雪日本淋しくなりにけり

と感懐した。

悔恨のあまり、人は去り行く花を、「落花狼藉」と呼び捨てにするが、これは、花と若葉との束の間ほどやりきれないものはないからだ。藤村は晩春の別離において、

時は暮れ行く春よりぞ、また短かきはなかるらん、恨みは友の別れより、更に長きはなかるらん。

と歌い、芭蕉は、

行く春や鳥啼き魚の目は泪

と句した。

王安石に逐われて、黄州へ流謫の身となった宋の蘇東坡は配所で三たびの寒食の節を過ごし、次のように詩った。

われ黄州に來たりてより、すでに三寒食を過ぐ、年々春を惜しまんと欲すれども、春去つて惜しむを容れず、今年また苦雨、両月秋のごとく蕭瑟たり、臥して聞く海棠の花、泥は汚す燕支の雪、闇中偷負し去る、夜半真に有力、何ぞ殊ならん病少年、病起して頭すでに白きに。

蘇東坡はこの詩の中で、真の闇の中に強力な妖怪が居て、これが人々が寝静まった真夜中に、そっと、白河の夜船に乗り込んで来て、人の命を奪い去るんだ、という。だから、知らぬ間に、昨日の紅顔が今日の白頭と化してしまい、その魔力に対して、人間は無力で、それを防ぐ術を全く知らないのだ、という。

夜が明けて朝を迎え、日が暮れては夜が来る。昨日は東の丘を越え、今日は西の谷を渡る。そうして、暦日ない野戦に明け暮れているうちに、一夜豪雨が山野をたたいて抜け去ると、天地を洗ひ流したような五月晴れの朝がやって来た。日本内地ならば、端午の鯉と吹き流しが青葉の風をはらんで、空に泳ぐ候季である。

越中の吹き流れけり見事にも

洗濯を了えた数人の初年兵が、庭の片隅の喫煙所に集まって、タバコを吸いながら、花の落ち尽くした山梨の木を見上げて、なにかささやき合っている。

「上等兵殿、一本つけませんか」

と、通りかかった私に、バットの箱を差し出すので、一本ぬいて、

「三くだり半をつきつけて、キツパリ別れて来た筈の誰かの女房が、こんなところまで追いかけて来たんだな。焼けボツクイに火がついたというのが、まさにこの事か。さても男女の仲は摩訶不思議というものか、なあ」と云うと、バットの持主氏が、

「自分たちは、みんな独身であります」

という。私は、期待はずれの返答に失望しながらも、仲間入りしていると、他の一人が、

「山梨の実甘いんですか」

と、途轍もない質問を私にあげかける。私は、「そんなもの、酸いも甘いもあるもんかい。お釈迦さんにでも訊くがいい」と、中腹になったが、梨の実の熟れる秋待ちがてぬ命をよその、その男の健気さに押し負かされてしまい、思いをとりなおして、

「それは、わからんさ、歩四九の奴らにでも訊かなけりゃ」と、いなすと、この答は彼等の理解に届かず、キョトンとしている。

彼らは入營そうそうに、思いもよらぬ二・二六の叛乱の渦中に巻き込まれ、ドサクサのうちに大陸へもって来られてしまった。自分たちの属する歩一が歩四九と組んで、歩兵第一旅団を結成し、それが第一師団の隷下であることすら知らないのである。

「歩四九の奴らは、山梨の実を食っているんでありますか」

「そうとも山猿だもの、常食にしているんだ。山梨の甲府でさ」

兵隊たちは、ハッハハッと、お互の背中を叩き合って笑った。

あご紐の歩哨が樹上から、ジロリと下を睨んだ。立哨しているのは古兵の河端一等兵である。彼は、「この俺様の勤務中に、事もあろうに、木を見上げて笑いとけるとは、失礼千万である」という風体をして、床尾飯で、コトリと床を突きわざと口をへの字にむすんで見せた。この万年一等兵の河端は、八認識一等兵という異名をとる中隊の人気者である。

野戦にある将兵が戦死し、その屍が草むした時、それを検分し確認することが必要となる。そのために八認識票というものを渡され、前線部隊の将校以下全員が肌身はなさず、これを携帯していた。それは、小さな小判形の真鍮板に番号が刻ってあるもので、このお守りをみんなが首から下げていた。

この票札は、この世においては、あの世行きの旅行券のよ